

## 現代の危機突破と「脱藩」

### ① 戦後民主主義・憲法の危機と 護憲派政党の政治的後退

本誌5月号の「編集後記」で「参議院選挙が近まるが、ラジカルな民主主義政党の登場もなく、民主主義とその憲法の危機が深まっている」と書かれている。編集長の心の重みを受け止めることができない非力さと責任を、一労組活動家として私も感じている。

戦後民主主義と憲法を支えてきたのは、旧社会党と共産党や、多くの護憲派の人たちであり、それを支えた労働運動や平和運動だったという図式で見ると、こうした大きな枠組みによる民主主義と護憲を掲げる政党の出現を期待することは、私も同感である。

しかし、残念ながら、次の参議院選挙では、現有の護憲派政党はそれぞれの枠組みの中の選挙となり、良くて10%前後の得票数の獲得（前回の衆議院選挙）で敗北となることはマスコミの報じる通りである。なぜ既存の護憲の政党はいくつにも別れたままの中で、敗北を受け入れる選択肢しかないのだろうか。私の考えは、民主主義と平和憲法の危機の中で、当面、違いを留保して、危機を共有する立場での、統一戦線的な組織と選挙態勢を作るべきだと考える。しかし、これは残念ながら夢物語である。であれば自分たちでこれをやる以外はないとさえも感じる。これが現代を生きて闘う人の等しい責任である。

### ② 「脱藩」という志士たちの思想的・政治的決断に学ぶ。

今年2月に全労協が広島で西日本春闘討論集会を開いた。これに参加した私は討論集会の会場に隣接する頼山陽・資料館を偶然に見学した。頼山陽は江戸後期の国学者で、「日本外史」を書き、明治維新を作り出す尊王攘夷運動に大きな影響を与えた人で、実際その息子の頼三樹三郎は安政の大獄で吉田松陰らとともに処刑されている。その頼山陽は20歳のとき武士を捨てて脱藩し、京都へ勉強の旅に出ている。脱藩とは当時では家をつぶされ、死刑が普通であった。しかし、彼は広島へ連れ戻され、廃嫡とはなるが、無期の謹慎で済み、のちのちに日本を代表する思想家・学者となる。

それまで徳川幕府は孔孟思想の儒学が学問の中心であった。これを尊王の国学が正しいと唱えるのだから、当時としては許されないものであるが、頼山陽らはこれを脱藩というまさに命がけの選択で決断し、学問を広め、その流れを作り出し、その結果、歴史を一つ変える力となった。

歴史物語では坂本竜馬の脱藩が特に有名だが、これと同じく、明治維新で活躍し、明治政府の初代司法卿（法務大臣）となった肥前・佐賀藩の下級武士の江藤新平もまた幕末期に脱藩をして、京都へ登っている。彼も捕まり、処刑されるころを、江藤が京都で書いた情勢文書＝「京都見聞」が藩主の目に留まり、有能さを認められ、異例中の異例だが5年の蟄居・謹慎で済んで、かろうじて命を長らえる。そして明治維新に「維新十傑の一人」とまで言われるほどに活躍し、初代の法務大臣として、フランス法を導入し、民の法律＝民法という言葉をもたらしめた人だ（これらの経過は、明治政府の法務官僚の穂積陳重の「法窓夜話」に詳しい）。

ともあれ、開国要求が諸外国から突き付けられ、動きが取れない日本（徳川幕府）は攘夷か開国か、尊王か佐幕かで揺れる。国内ではこれを突破するためには、幕藩体制の転換が必要で、そのために自らのこれまでの身分や、既得権を捨てて、大義のために働くことが求められた。封建制度＝幕藩体制に縛られては活動家とはなりえなかったし、そのためのキーワードが脱藩で、若く、改革に燃える身分の低い武士たちの共通した決断であった。

### ③、私たちの「脱藩」。

そして現代。1990年前後の数年間に世界の歴史が転換した。世界的には社会主義ソビエトが崩壊し、冷戦が終わり、新自由主義が台頭し、日本では総評が解体され、連合ができ、社会党も社会民主党と民主党と新社会党に別れ、政党やセクト、労組の枠組みが3つも4つにも分かれたままで20年余が経過した。

私たちといえば、全通の連合化を良しとせず、連合反対の10幾つの全労協の独立労組を立ち上げる。当時は権利の全通が、まだ少しは権威があるころであり、私たちの決意は、まさに脱藩そのものであった。そして難しい中、この各独立労組の統一協議会を実現し、郵政全労協から郵政ユニオンへと組織の統合を図りながら、前進をしてきた。

しかし当時、まず連合反対で全通を割ることへの「分裂主義者」との内外からの批判が強く、独立労組の指導者の大半は全通から除名され、地域の労働運動の世界からも団結の破壊者として排除された。また支持してもらえと思っていた左派系の人からも「左翼小児病だ」だと笑われ、多くの党派からも「永久追放」だとか機関誌などに書かれた。しかし、その全通、今はどうだろう。長崎的にいえば、当時の同盟系の労組=全郵政と統合し、長崎地区労から離れた。今でも民主勢力を自称するが、社民党や共産党とは距離をおく。そして当時の左派(?)だった幹部たちは議員などの身分を得ていて、私たちとはずいぶん距離がある。その意味では当時も今も全労協の独立労組は必要だったと確信する。

だがこの危機の中、長崎でも友人たちと政党の大同団結はないのだろうかと話すが、それぞれは「相手が信用ならない」という態度だし、団結は進展しそうにない。みんなは社会主義運動の中で培ってきた考えが一番大事だし、そのための党が命であることはわかる。しかし現実には、共産党と社会民主党をあわせても8%しかない得票率であり、新社会党は議席がゼロである。どうして護憲派は次の参議院選挙で勝てるのだろうか。

#### ④、郵政ユニオンの軌跡から考える。

相互不信を生んだ戦後社会主義運動と労働運動史の中で生きてきた諸先輩たちは、決して譲らないことを思想的にも美学として語る。労組からは脱退しないし、政党は独自性(党派性)を守ることが階級的だという人が多数だ。私も若い頃はマルクス主義の理解度が活動家の最低の要素だと学んだが、以来40年、この色は薄い。70年代以降の各セクトの対立はこれを決定的とした。彼らから見ると私の階級性などとは「なまくら」だと見えるらしいし、40歳以下の現在の郵政ユニオン長崎の活動家たちから見ると、対立自体になかなか理解がいかないともいうが。

しかし、郵政ユニオンの23年は、このさまざまな人の組織の違いと対立という難しい当時の図式をなんとか乗り越え、左派系労組=郵政ユニオンとしての大同団結を第一のテーマとして、わずかだが前に歩んできたと思う。その結果、郵政の中では微力だが存在感と、いくつかの意義ある闘いの勝利を勝ち取り、今日がある。日本における左翼の少数派労組は結成参加労働者の一代限り、という常識を超え、郵政ユニオンは結成以降組織が次第に増加してきた。後発で参加した人も、当時の全通の役職者も多く、ある意味、現場労働者としての

身分と既得権を捨てて、この少数労組へ飛び込んできた人たちである。そして彼ら、彼女らが組織を受け継ぎ、ユニオンは第2世代に世代交代を図っている。

#### ⑤ もう一つの「脱藩」＝郵産労との統一。

そして、昨年7月、郵政ユニオンは全労連の郵産労と合併をした。郵政産業労働者ユニオンである。このことは左派系の労組の中では話題にはなったが、「大丈夫かい」と「ユニオンがとりこまれた」という受け止めが一般的である。そして約一年。飛躍的な発展はなかなかないが、結成祝賀会の中で言われた「成田離婚がないように」という心配は、今のところ起きておらず、無事のように、この6月27～29の3日間、第2回の定期全国大会を東京で開く。

郵政ユニオンが全労協労組として、少しは認知されるようになった意味で言えば、今さら全労連とやることは、自らの存在を捨てることにもつながる。胸を張るほどの大労組でもなく、既得権もさしてないが、組織を統合することは、既成の枠組みの解体であり、まさに90年の脱藩としての郵政全労協結成に続く、再度の現代の脱藩的な行為であることは間違いない。

#### ⑥ 大きな共通の敵と闘う、大同団結へ！

私はこの統合で、相手（郵産労や全労連とその支持政党）がどう思っているかなど、完全に理解はできていないのも事実である。全国の諸情勢はわかりづらいし、動きも早い。しかし大同団結は難しいという垣根を一つ越える挑戦だったことは間違いない。マルクス主義の階級的理論性からいうと、どう総括されるのか知らないが、会社という相手を同じくして、一緒にストライキを5年間闘い続けてきて、相互に信頼感を共有し、現場で働く人のために存在価値のある労組を目指すことはできたと信じる。当座はこれでいいのではないか。なによりも分裂して、お互いがいがみ合うよりも、いいと思うからだ。ここが出発点である。

1991年の郵政全労協の結成が一つの前例のない実験であったとすれば、これはつぶさず、つぶされずにクリアできた。そして次が、全労協と全労連の小さいながらも分裂労組の組織統合という二つ目の実験がいま開始された。現実的にはなかなか難しいが、統一は維持されている。

今一番必要なことは、それぞれが自分の足元を固め、敵と正対することであるが、しかしそれだけでは正直り貧である。であれば、腰がふらついても、

次のステップへ向かって、政党でも労組でも、大同団結にチャレンジするときがいまだと思う。それぞれが自分の組織の枠組みを一つ越え、現代の脱藩をなすべきなのである。これなしには護憲・平和勢力の大きな力としての運動は難しいと思う。

## ⑦ 過去の分裂を凍結して

徳川末期、武士を捨て、脱藩という決断で、明治維新を作った人たち。以来、145年。現代を振り返り、現状のままでは階級的な労組も社会主義政党もなかなか展望が見えない。いまでさえ改憲派が多数の国会情勢である。まさに時代は大反動の極にあり、激動期でもある。

平和勢力を自認する私たちが、この時代を先取りし、状況を立て直すためには、志を同じくする人たちが大枠を認め合い、大同団結すべきであることは誰でも理解していることであるが、しかし、これまた誰もがわかるように、難しいことでもある。

分裂を乗り越え、団結をする。この壁を打ち破る力はなにか。それにはなにが必要か。一言で言えば、分裂のもととなった時代の、それぞれの分裂の理由を白紙に戻し、分裂状態前に戻すべきなのである。しかしこれもまた難しい。クモの巣の糸のように絡みあい、明治以降、さらには戦後でも、もつれた社会主義と労働運動の思想と組織に、統一という束ねをかける理論と信頼が全体にないからだ。であればこれは、相互の違いと対立を当面、凍結する以外にない。

## ⑧ 護憲派総結集のための「現代の脱藩」を！

この2月の広島春闘討論集会の中で私は、この頼山陽の脱藩を引用し、現代の脱藩＝既存の組織を乗り越える決断と、広く大同団結を訴えた。郵政ユニオンの組織統合の報告という意味合いもあって、一応は聞いていただいたが、いかにも政治的には素人の、稚拙な論だと感じられたに違いない。しかし、私は今も、運動の第一段階としては、これしかない、ぼんやりだが感じている。まさに統一しての闘争こそ事態を打開するカギだと思っている。

全国では関係当事者たちにより、こうしたことに様々な努力が行われているとは思いますが、目に見える形で実績と結果を出さなければ、全労働者・国民の期待に護憲派は応えたとは言えないと思う。働く人たちが、護憲・平和という同じ目的を持っていながら、一緒に闘えない。この現代の人々の矛盾を解決でき

ない護憲・平和のための思想、論理と運動は、150年前に頼山陽たちが掲げた思想よりも、現実と明日を見る目が劣るとさえ感じる。

ともに闘うために、一人一人が過去だけにとらわれずに、自由な心で自らを解放しなければならないのではないか。あなた自身にとって現代の脱藩とはなにか。この具体化。これが現代の危機に突きつけられている中身だと思う。

2013/5/20

郵政産業労働者ユニオン

長崎中郵支部

中島義雄

（「地域と労働運動」152号。（2013/6月号）に投稿し、掲載されたものです。文中の小見出しは編集部がつけられたものをそのまま載せています。）